

# バロックから見返す精神史

科学・哲学・文学

坂部 恵

# ヴォリンガーとスコラ哲学

- ヴォリンガー(1881~1966)『抽象と感情移入』(1908)(ヨーロッパ中心的芸術の価値の顛倒)
- カンディースキー、クレーらのルネサンス以来の具象絵画の文法・形式を脱構築する現代抽象絵画、表現主義等の運動と併走
- 『ゴシックの形式問題』(*Formproblem der Gothik*), 1911: おわり近くに「スコラ派の心理」の章
- 「このようにスコラ主義者は、知的認識によって神性に近づこうとしていたとはいえない。むしろ彼は彼自身の思考法によって、すなわち混沌としていながらも、論理においては非常に巧妙な思考運動の紛乱によって 神性を体得しようとしたのである。」

# スコラの文体の多声性

- 「装飾のうちで、彼が直観的にみうるようにしたような抽象的な運動過程、……それらと同様の陶醉と済度とを与えたあの精神的な法悦感を彼のうちによびおこしたのは、決して思考の成果なのではなくて、まさしく思考の抽象的な運動過程なのである。」
- 最後に行き着く結論ではなく、種々の異論を disputatio 討論の道行きをたどって検討するスコラ特有の方法の「運動過程」に、真理とのかかわり、「神性の体得」を見ている
- 中世の多声音楽 (polyphonia) に通う多声性だろう

# 哲学における文体の重要性

- 「こういう種々の発現を相覧して、その実質には種々の差異があるにもかかわらずそれらをまとめあげて同様な現象成果に変えているものは、一つの特定の形式意志にほかならない。」
- このあたり、ヴォリンガーのいささか熱っぽい口調が示唆しているのは、哲学における文体の決定的な重要性だろう
- 今日哲学のスタンダードな文体と一般に見なされているものは、大方19世紀起源のものである
- スコラの文体を19世紀流のそれにあまさず翻訳可能と見なすいわれの無い先入見

# 近代進歩史観の批判

- 「今までそれ自体が目的であったところの思考が、ルネッサンスによって、目的に対する手段に変えられるようになった時、.....それは中世的思考の全体を針路からはずさせ、軌道からはなれさせた一種の大団円であった。」
- ヴォリンガーの同世代の画家たちが興した抽象絵画は、当然ルネッサンス以来の古典近代(具象)絵画への根底的批判を含んでいた
- 16世紀あたりを起点とする近代単声音楽が、ルネッサンス以来の一点透視の遠近法に対応し、それはまたデカルト的人間主体に並行する。そうした流れが相対化されるのが20世紀(初頭以来)

# 中世的的精神性の最後の輝き・バ ロック

- ベンヤミン(1892~1940)
- 『ドイツ悲劇の根源』(1923~25成立、28年刊)
- ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』、ハイデガー『存在と時間』などとともに、20年代の記念碑的著作。現代哲学の古典中の古典、と私は見る
- 「認識論的序章」では、バロック悲劇(Trauerspiel)とギリシャ悲劇を対比し、バロックのアレゴリーのひとつの源泉を東方ビザンツ文化に見、またアフォリズムの文体のこの研究対象への適合性を説く
- バロックの哲学者としてライプニッツが論じられる

# ベーコン・バロック

- F.Bacon(1561~1626)シェークスピアの同時代人
- シェークスピアの発見は18世紀後半、カーニバル的哄笑(ベンヤミンもシェークスピアを典型的なバロックに数える)
- これは、バフチンのいうとおり中世的なものである
- ベーコンの「アフォリズム」讃
- こうした文体の面での特徴は19世紀流哲学史の構図では当然無視・軽視されてきた
- 帰納法 *inductio*, 発見法 *inventio* 重視(ヴィーコも)
- リベラル・アーツから人文主義にいたる流れの思考の文法の特異性(70年代以降再発見)